

Cover Presentation

表紙プレゼンテーション



松本 大

Text by MATSUMOTO Dai

建築家

都市環境マネジメント研究所 研究員

松本大建築設計事務所 代表

中心は、二階の遊行の中心たる客間にある。二階を高く造り、通りに面し、高欄を張り出し縁側を設け、雨戸を入れる。これに対して一階は「木虫籠（きむすこ）」と呼ばれる揃いの出格子を備える。一階と二階面は凹凸が少なく、各層の構成要素が一元化されており、通りに沿って、格子、雨戸が連続して連なる単純化された立面が美しい。客間の雨戸を開け放



「風情」を漂わす新たな用途でいかに守り通すか

茶屋街 (金沢市)

昼

下がり、茶屋街を通して歩いた。あらためて感じるのは、町並みの修景が進んでいること、建物の利活用が活発に行われていることである。修景に関しては、行政当局の長年にわたる取り組みが実を結んでいる。石畳の舗装など、かつてあった姿を再現する点から見ると疑問もあるが、「綺麗」な風景の発信力は捨てがたい。

このような修景に呼応して、茶屋建築を生かした様々な店が軒を賑わせている。ここでは、甘納豆屋に鮎屋。主計町では、ギャラリィ、バー、居酒屋、旅籠。ひがしでは喫茶、ワインバー、ビストロから土産物屋まで。地元の伝統的な菓子、食品、工芸のアンテナショップも随分増えた。茶

屋を貸切の宿として貸す新しい動きもあり、ひがしで二軒、主計町で一軒、それぞれ営業を始めている。気軽に芸妓の踊りを体験できる貸し切りのお座敷もあるようだ。

茶屋街はいまや、兼六園と並ぶ観光地である。金沢のイメージシンボルでもある。茶屋街が観光地として賑わうことは悪いことではない。寂れるままの茶屋街では寂しすぎる。しかし、単に賑わいがあればいいというものではない。訪れる人は何を茶屋街に求めているのか。それは言葉を返せば、金沢に何を求めるのかということにもなる。茶屋街は金沢の美しいイメージでもあるのだから。茶屋街の店主との会話にものぼった言葉、それは「風情」であると思う。そして「風情」は賑わいからは少し遠いところにある。

茶屋建築は町屋建築の一形態ではある。しかし似て非なるものである。それは極めて高度な虚構性を持った形式である。まず住居ではない。町屋が路面に「みせ」を持ち、一階が中心であるのに対して、茶屋建築の



ち、各戸の座敷のざわめきが、通りを介して溶けあう。

このように、茶屋街はもとも「つくられたもの」、虚構性を持ついわゆるテーマパークであったともいえる。それゆえに、現在様々な用途を飲み込んで成立しているのだ。しかし、やはりそこで営みを持つ者には、厳しい自問が必要だ。そこに「風情」はあるのか。先人が伝えてきた、人情と機微、そして粋。茶屋という用途だけでは、いつまでも茶屋建築を支えていくことはできない。時代に即して新たな用途が挿入される必要がある。しかし、そこには先人の精神への尊敬の念が必要だ。依然とし

メモ 金沢の茶屋街

ひがし茶屋街にし茶屋街、主計町茶屋街をさす。文政2年(1819)にひがしにしは公設が許されており、この時点を発祥とする。主計町は明治2年(1869)に置かれた。いずれも日本の茶屋文化を伝える貴重な町並である。ひがし茶屋街は平成13年に、主計町は平成20年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。